

## 専大校友を訪ねて

手漉き和紙に20巻の歴史絵巻を制作中の日本画家 北條楽只さん(本名・忠一=昭和42経済)



9月10日、満月の富士裾野で日没から日の出まで行われた「富士山賛歌2003」。音楽家・喜多郎さんらが太鼓を打ち鳴らす舞台に、縦1.6メートルの幻想的な巨大あんどんが登場、観客をあっと言わせた。このあんどんを制作したのが日本画家の北條楽只さんだ。

甲府から身延線で1時間。甲斐駒ヶ岳を望む市川大門にアトリエを構え、ハワイ移民絵巻の制作に全力を注いでいる。

横浜市生まれ。横浜工業高校から経済学部に入學した。ゼミでは中小企業のマーケティング論を学んだ。「神宮球場にはよく応援に行ったね。昭和40年、芝池博明投手で優勝したときはうれしかった」と目を細める。

「専大には縁があって、神奈川新聞社にいる弟の哲也(昭45文)も専大、娘の総子(平12文)もテニス部で、実業団のリコーに入った。専大一家だねと笑うんだ」と北條さん。

ご本人は昭和42年、日本 Herald 系の PR 映画社に入社。このときハワイの宣伝映画製作で同島に渡り、移民一世と出会う。「明治期からハワイに渡り苛酷な労働で多くの人が脱落した悲劇を聞き、いつか紹介したい」と思った。日本画の巨匠小松均画伯の門を叩き、手ほどきを受けたのもこの頃からだ。

その後昭和45年にテレビ神奈川に移って制作、事業、営業畑を歩き、平成11年に退社。念願の絵巻に着手した。「これまでアジアなどへの移民のことは書かれているが、ハワイのことは意外に知られていない。それでどうしても知ってもらいたい」と描き始めた。絵巻物は1巻が20メートル。黒船来航から描き起こし、ハワイ移民の一生を事件、戦争など背景に描く。日本に無いので海外から歴史資料を取り寄せるのに苦労するが、それを基に一枚一枚構想を練り、苦難を絵筆にこめる。完成は再来年を予定。「20巻が出来たら世界最長、400メートルの絵巻物になる。完成したら全国で個展を開きたい」と熱がこもる。

【ニュース専修10月号5面】